

2013年11月15日（金）にまなびピア2013関連事業として「生涯学習とコミュニケーション」をテーマに青山学院大学苅宿俊文教授による講演とワークを実施いたしました。

当日は、平日夜間の開催にもかかわらず22名の参加者にお集まりいただきました。苅宿先生のご紹介のあと、まずは生涯学習とコミュニケーションについて、将来必ず日本を訪れる人口減少と高齢化の社会へ向けての生涯学習のあり方や考察から講演がスタートしました。

日本社会は50年後には40%が65歳になることが統計上分かっています。これは世界でも稀な状況であり、平均寿命も90歳ぐらいまで延びていくことでしょう。そのような状況の中、学校というシステムの中でだけで学んだことで、成人してからの70年を生きていけるかという難しいようです。今までになかった仕事ができ、入れ替わってく世の中で、大人たちが自分自身の価値観を入れ替えていかなくてならないでしょう。生きていくために生涯学び続けることが必須になる社会となっていきます。まさに生涯学習がここにあります。それでは、大人の学びとは何か。それは社会構成主義学習観の学びであり、分かち合う参加型の学習であり、生成されるのは納得解であるのです。

<ワーク1>

ここで、「これからの社会で大人が学ぶべきものにはどんなものがあるか。」という問いについて、ミーティングレコーダーを使ってグループで対話する姿を録画し、それを見ながらの振り返りを行うワークを体験しました。

ワークに入る前に苅宿先生から、「この講演やワークを、単に知識を得ていくことだけではなく自分が出力する（体験を人に伝える）ことを想定して入力をしていくことが重要であり、みんなで意味を作っていくことが大切だ」というアドバイスがありました。

参加者達は、自分の学びを俯瞰してみる学びとの距離感を測っていく感覚、自分の学び方の立ち位置を意識しながらワークショップに入りました。

小さなタワーのようなミーティングレコーダーは、360度撮影できる小さなカメラがついていて、タワーの周りで話している姿を映像として録画でき、すぐに振り返る（映像を再生して見る）ことができます。

普段は見えない自分の話している声や、仕草に、みなさん興味津々でした。それぞれのグループで、自己紹介から始まり、大人が学ぶべきものへの対話がありました。

興味深いのは、話している姿や内容に、自己評価の方がネガティブな反応になりがちで、他者評価の方が好印象になるところでした。

このことから、苅宿先生は「体験—モニタリング—省察（振り返り）」について考察していきます。モニタリングしていくことで、体験を俯瞰して自分をもう一度見直していくことができるそうです。自分と他者の相互作用をどのように捉えていくのかが重要で、双原因生感覚こそが協働性を支えていく感覚であるそうです。

モニタリングの意味をふまえて、もう一度ミーティングレコーダーでの対話の体験をしました。「大人の学びで学ばなければならないこと」を話し合い終了しました。